

「本別農業 地域と歩んだ80年」

特別企画

第1回 軍馬の悲劇乗り越え

【写真提供】本別町歴史民俗資料館

「馬の国」 農作業に欠かせぬ存在

今から200年以上前、十勝に馬はいなかったという。『十勝20世紀』（十勝毎日新聞社・編）によると、十勝の馬の起源は明確ではありませんが、先住者のアイヌの人たちが馬を持たなかったことから、1799年（江戸時代）に本州から持ち込まれたのが、十勝における人と馬の生活の始まりとされています。馬は当初、物資の運搬や連絡手段に使われていました。

馬産が盛んになったのは、開拓期から戦後の高度経済成長期となる1960年代にかけてであり、馬は農作業に欠かせない存在となりました。十勝地区農業協同組合長会前会長の故・有塚利宣氏（1931〜2025年）は、生前「馬は家族であり、友だった。馬がいなければ、十勝農業は成り立たなかった」と何度も語っていました。



大正時代、本別は馬産地として有名でした。

もありました。しかし、1960年代にトラクターなどの機械が普及すると、一気に減り続け、現在では、ばんえい競馬など一部でしか見る事ができなくなりました。

ばんえい競馬の原点 農業の苦勞を支え 地域の娯楽へ

機械のない時代、農業は「人馬一体」で行われ、過酷な作業が続きました。娯楽の少ない中、農作業の疲れを癒してくれたのも、馬の存在でした。

地域の余興として始まった草競馬や祭典競馬は、やがて定着し、帯広をはじめ十勝各地で開催されるようになりました。神社の祭典余興として始まっ

戦後80年という節目を迎え、本別農業は大きな転機にあります。1948年に本別町農業協同組合と本別町開拓農業協同組合の2つの農協が設立され、1986年の合併で一本化されて現在に至ります。



戦前から戦後にかけて、農協は農業だけでなく地域経済の発展をけん引してきました。しかし今では、高齢化や過疎化などで組合員戸数が減少し、足元の営農基盤にも揺らぎが見えはじめています。だからこそ今、80年にわたる歴史の中で、度重なる苦難や課題に立ち向かってきた先人たちの知恵や取り組みを振り返ることで、本別農業のさらなる成長の足掛かりにしていきたいと思います。

今回の特集では、本別町歴史民俗資料館の全面協力のもと、貴重な写真や文献などをご紹介します。本別農業の歩みとこれからの展望を探っていきます。

この特別企画の連載は7月号から来年3月号までの全5回を予定しています。若い農業者の皆さまにも、ぜひこの特集を通じて地域と農業の未来に目を向けていただけたら幸いです。（特別企画取材班）



農作業で土を耕す人と馬



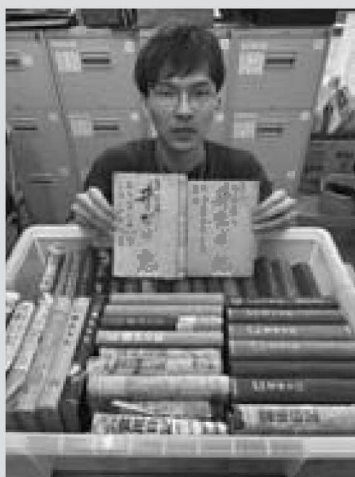
た勇足競馬は、1912年（明治45年）に始まり、昭和30年代まで続けられました。ばんえい競馬も開かれていたと伝えられています。

1916年（大正5年）、本別駅付近で開かれた草競馬が本別競馬の始まりで、度々開かれた大会は大勢の人が集まり盛況を極めたそうです。

道外の祭典競馬とは異なり、十勝では農耕や重量物の運搬のために改良された重種馬（日本晩系種）が主役となりました。農業とともに歩み、独自に発展してきた重種馬は、現在のばんえい競馬へと受け継がれています。ばんえい競馬は、かつて旭川市・北見市・岩見沢市でも開催されていましたが、現在は帯広市のみで

トピックス 『井出日記』が語る 本別開拓史

「本別の開拓八翁」と呼ばれ、J A本別町の前身である本別信用購買販売組合（産業組合）初代組合長の井出英作氏（1865～1944年）が残した日記は、本別の開拓史を語るうえで欠かせない貴重な資料です。町歴史民俗資料館には、約40冊が良好な状態で保存されており、現在、解説作業が進められています。



資料館に保存されている『井出日記』

令和6年12月7日開催
帯広ばんえい競馬にて
（フルーサファイア号・本別町）



続けられています。体重が800kgから1tを超える重種馬は、本別町では現在9戸の生産者によって105頭（令和6年12月末時点）が育てられています。

これらの馬は、開拓期からの先人たちの苦勞と想いが詰まった、農業文化の結晶とも言える存在です。

軍馬補充部の光と影 馬産で町発展も 戦争の足音

農家にとって家族であり、友でもあった馬が、やがて受難の時代を迎えます。日露戦争をきっかけに、国を挙げて軍馬の改良と生産が加速されました。陸軍省は軍馬の供給と育成を目的に、全国8カ所に軍馬補充部を設置し、1909年（明治42年）には十勝支部が本別町仙美里（現在の北海道立農業大学校）を中心に置かれました。

約2万畧の広大な土地を活用し、大規模な軍馬の育成や調教が行われ、獣医学や畜産

技術の研究も進められました。道内に設置された4支部は、やがて統廃合されましたが、本別の十勝支部は終戦まで存続しました。

歴史の皮肉というか、軍馬補充部の設置によって、本別では馬産に関連する農業をはじめ、商工業が盛んになり、鉄道の整備が進みました。町の発展と軍馬生産は、深い関わりがあったのです。また、軍服用の繊維を供給していた亜麻工場があったことから、本別町は空襲を受けたとも言われており、こうした出来事は「負の歴史」として語り継がれています。



出征軍馬（日の丸と共に、首元には「一死報國」のたすきが掛けられている）



軍馬補充部十勝支部全景



馬市の様子（昭和51年2月18日撮影）



バロン西氏とウラヌス号

愛馬ウラヌスとともに 本別に刻んだ

バロン西の足跡

肌身離さず持つていた愛馬ウラヌスのたてがみ——。

戦後、米国から返還され、遺族を通じて町歴史民俗資料館に寄贈されました。

その持ち主は、1932年（昭和7年）にロサンゼルス五輪・馬術競技で金メダルを獲得した『バロン西』こと西竹一氏です。旧華族の家に生まれ、男爵（バロン）という身分を持つ馬術の天才であり、日米親善の象徴的な存在でもありました。

陸軍騎兵将校だった西氏は1939年（昭和14年）に、軍馬補充部十勝支部へ配属され、本別との縁が生まれました。1年余り軍馬の育成指導にあたり、金メダリストの国

民的英雄として、専用官舎や乗馬練習場が用意されるなど、VIP待遇を受けていました。

夏には家族を東京から呼び寄せて道東観光を楽しみ、馬を襲った熊を射止めた写真を家族に送るなど、豪快でおおらかな一面も見せていたと言います。軍馬の育成指導では「愛馬精神」を重んじ、馬の健康や栄養管理にも細かな配慮をしていたそうです。

「自分を理解してくれる人は少なかった。だが、ウラヌスだけは言葉にしなくとも、自分を分かってくれた……」

第二次世界大戦で硫黄島に出兵し戦死するまで、西氏はウラヌス号のたてがみの一部をポケットに忍ばせていたという心温まる話があります。

彼が戦死して1週間後、東京で余生を過ごしていたウラヌスも、かつての主である西氏の死を感じたのか、静かに息



ウラヌス号のたてがみ

を引き取ったとされ、まさに「人馬一体」の強い絆が刻まれたエピソードと言えます。

『馬魂不滅』

名もなき馬の記憶
全国から慰霊今も

現在、歴史の記憶を静かに伝える慰霊碑が、本別町美里別東下（JA本別町家畜共進会場隣）にひっそりとたたずんでいます。

『馬魂不滅』。さらに「怨念こもる痛恨のいななきを残し、この世を去った軍馬等々供養する人もなし」などと刻まれた軍馬鎮魂慰霊碑には、今も全国から参列者が訪れ、そつと手を合わせています。

この慰霊碑は、名もなき馬たちの悲しい記憶を風化させないよう、旧国鉄仙美里駅長の故・森弘さん、そして志を共にした故・楠茂音吉さん、故・泉野健さんの3人が1988年（昭和63年）に私財を投じて建立したものです。

「生きる兵器」……。そんな

恐ろしい言葉が当たり前だった

た戦時中、仙美里駅から数千頭の軍馬が中国大陸などの戦地へ送り出されました。森さんは当時、嫌がる馬を列車に乗せる作業を手伝っており、終戦後、馬踏板に残されたひづめの跡を目にしました。その跡が森さんの心に深く刻まれ、馬たちの安らかな眠りを願う慰霊碑の建立を決意したといえます。森さんは生前、「馬の夢を毎日見る。軍馬の歴史を伝えてほしい」と語っていました。

この取り組みは全国的にも反響を呼び、戦争に翻弄された馬たちの無念を後世に伝える象徴となりました。

軍馬補充部十勝支部の記録は終戦後に廃棄されたので、



馬踏板と森弘氏（仙美里駅にて）

ほとんど残っていませんが、本別町にはその記憶を語り継ぐ場所があります。慰霊碑の管理と供養はJA本別町と町馬事振興会が担っており、毎年本別空襲のあった7月15日に関係者が参列し、ご冥福をお祈りしています。



軍馬鎮魂慰霊碑

【予告】

次号では、戦時下に軍服の素材として使われた「亜麻」に焦点を当てます。時を超え、いま再び注目される「機能的食品」としての可能性とは……。本別町に残る亜麻工場の記憶をたどりながら、素材の新たな命を見つめます。次号もぜひご覧ください。